

三六一 謂ふ勿れ、老いたり、老いて益奮ふ。謂ふ勿れ、窮まれりと、窮まりて益固し。已にして固く且つ奮へば、以つて吾が学を成すべきに庶幾からん。

勿レ謂老矣、老而益奮、勿レ謂窮矣、窮而益固已固且奮、庶幾可_レ以成_二吾學_一矣、

【訳】たやすく言うな、老いてきたなど。老いてますますやる気になっている。たやすく言うな、もうおしまいになってきたなど。おしまいになってきて、ますます信念が固いものになってきている。信念が固く、やる気を出せば、自己の完成という私の学問が成就するのも近いだろう。

三六二 読書は只是れ看得で徹らんことを要す。看得で徹れば、則ち以つて吾が志を奮ひ、以つて吾が識を拓き、以つて吾が徳を成す。然らざれば、則ち悠悠泛泛として、胡乱に涉獵す。好事者の一時消間の具たるのみ。

讀書只是要_二看得徹_一、看得徹、則以奮_二吾志_一、以拓_二吾識_一、以成_二吾徳_一、不然則悠悠泛々、胡乱涉獵、好事者一時消間之具耳、

【訳】読書は、書物の真意を読み取ることが大切なことである。書物の真意を読みとり、納得できれば、自分の志は奮い立ち、知識は広くなり、徳は積まれていく。そうでなければ、沢山の知識に振りまわされ、ただ沢山の書物を読みあさるだけである。それでは、物好きな人の一時のひまつぶしにすぎない。

三六三 精神志気は只放鬆を怕る。放鬆散漫なれば、天下為すべきの事なし。

精神志氣只怕_二放鬆_一、放鬆散漫、天下無_レ可_レ爲之事、

【訳】志を持ってやっていくには、自分の気ままだが心配だ。気ままで、注意散漫では、この世でできることは何もない。

三六四 余、昨夜「朱文公年譜」を読み、深く感ずる所あり。既にして寢に就くも、寢寐の間、猶ほ時に憶ひ起し、警省奮発の念に勝へず。因つて思ふ、余の放廢するや、亦已に久しと。

余昨夜讀「朱文公年譜」、深有「所」感、既而就寢、寢寐之間、猶時憶起、不「勝」警省奮發之念、因思余之放廢也、亦已久矣、

【訳】私は昨夜「朱文公年譜」を読み、深く感動した。寢床に入つても寢ても覚めても思い出されて、そのたびに氣を引き締め、反省しやる氣が出てくる。私がその方面の学びを止めてからずいぶん時が経つたなあと思つている。

三六五 平居尋常、許大過端の挙ぐべきなくば、以つて同志の指摘を免るべし。而るに隱微の間、欺罔日に多く、墮落自ら甘くして、復た公論の、天下後世にあるを恤へざるなり。

平居尋常、無「許大過端可」舉、可「以」免「同志指摘」、而隱微之間、欺罔日多、墮落自甘、而不「復」恤「公論之在」天下後世「也」、

【訳】常日ごろ、目立った大きな過ちがなければ、同志の非難指摘を免れることはできる。しかし、人の気づかない微妙なところで、人や自分をあざむきだますことが多くなり、墮落して自らに甘くしていると、広い世間や後生に厳しく正しい議論がなされるであろうことを恐れなくなつてゐる。

三六六 謂ふなかれ、余一人のみと。天下自ら多少般の人あるなり。謂ふなかれ、僅かに百年のみと。身後の歲月甚だ長く、而して公論の掩ふべからざるは、猶ほ日月を掲げて行くがごとし。

莫「謂」余一人矣、天下自有「多少般人」也、莫「謂」僅百年矣、身後之歲月甚長也、而公論之不「可」掩、猶「揭」日月「而行」、

【訳】言つていけない、私一人のことだと。世の中には、多くのいろんな人がいるのだ。言つてはいけない、わずか百年ぐらいのことだと。死んでからの歲月はとても長いのだ。だから、公論から覆い隠すことができないのは、太陽と月を頭

上に掲げて歩いているようなものだ。

三六七 男児、世に処^おりて、肯^あへて此処より志を立て身を持し、挺特巍然^{ていとくぎぜん}、天を戴き地を踏みて、千古不朽の図を為すもの、亦壯と謂ふべし。

男兒處^レ世、肯從^ニ此處^ニ立^レ志持^レ身、挺特巍然、戴^レ天蹈^レ地、而爲^ニ千古不朽之圖^ニ者、亦可^レ謂^レ壯矣、

【訳】男子はこの世に生まれれば、すすんで志を立て生活態度をきびし守り続け、周りからも際立ち抜きん出て、この世にあつて力強く、いつまでも滅びないはかりごとをなそうとする。そういうのを、壮士というのだ。

三六八 余、頃^{うしな}一長女を亡ふ。其の哀情の發する、自制し難きものあり。

余頃亡^ニ一長女、其哀情之發、有^レ難^ニ自制^ニ者、

【訳】私は先ごろ長女を亡くした。その悲しみは、自分で制することができないほどだ。

三六九 父子の愛は、蓋^{けだ}し天性なり。其の哀しみは固^{もと}より亦天理なるも、惟^{ただ}或ひは自ら遣^やる能はずして、其の常度を失ひ、以つて生を傷^{やぶ}るに至らば、則ち是れいはゆる哀しみの、節に当らずして過ぐるもの、慎まざるべからず。

父子之愛、蓋天性也、其哀固亦天理、惟或不能^ニ自遣^ニ、而失^ニ其常度^ニ、以至傷^レ生、則是所謂哀之不^レ當節而過者、不^レ可^レ不慎、

【訳】親子の愛情は、おそらく生まれ持つてのものである。だからその子を失った哀しみというのも当然のことであるが、ただ自分で乗りこえることができず、日常の生活態度を逸するほどになり、生きる力を失うほどになれば、これはいわゆる哀しみが節度を超えてしまうことで、慎まなければならない。

三七〇 昔、子夏、其子を喪^{うしな}ひて明を失ひ、而して曾子の責^{まね}を來く。昔の賢すら猶ほ免れざるものあるがごとし。

昔者子夏、喪^{うしな}其子^二、明^一、而來^二曾子之責^一、昔賢猶^レ有^二不^レ免者^一矣、

【訳】昔、子夏はその子を亡くして、哀しみの余り失明してしまい、同門の曾子の叱責を招いた。昔の賢者さえこの哀しみで生きる力を失うほどであったのだから自分も同じだ。

三七一 哀しみを過ぐすは固^{もと}より不可なるも、哀しまざるも亦人情にあらず。此の間極めて亦処し難し。

過^レ哀固不可、不^レ哀亦非^二人情^一、此間極亦難^レ處、

【訳】哀しみの度が過ぎるのは言うまでもなくよくないことであるが、哀しまないというのも、また人情ではない。哀しみの度が過ぎることと哀しまないことは簡単に対処できることではない。

三七二 義は天理の公、利は人欲の私なり。

義者天理之公、利者人欲之私、

【訳】人として守るべき正しい道は、万物に通じる道理で社会の全体に関わること、利益を得ることは、人間の欲望で個人に関わることである。

三七三 人の心は義利相消長^{あひ}を為す、猶ほ水の、火と其の勢ひ両立せざるがごときなり。

人心義利相^レ爲消長、猶^二水之與火其勢不^二兩立^一也、

【訳】人の心の中には、義と利が共に起こったり消えたりしている。まるで、火と水との勢いが同時にあることがないのと同じようなものだ。

三七四 義を主とせば、則ち父に於いては自ら孝、君に於いては自ら忠、家斉ひ国治まり、天下は富強を期せずして富強たり。

主義、則於_レ父自孝、於_レ君自忠、家齊國治、天下不_レ期富強_一而富強矣、

【訳】義を主とすれば、父に対しては自然と孝行となり、君主に対しては自然と忠義となり、家庭は安らかで国は治まる、世の中は豊かで強くなり、強いてそれを願わなくても、自然に豊かで強くなる。

三七五 利に徇_レへば、則ち相貪り相犯し、以つて背戾に至る。家斉はず、国治まり難し。いはゆる「粟ありといへども我得てこれを食はんや」なるものなり。

徇_レ利、則相貪相犯、以至_二背戾_一、家不_レ齊、而國難_レ治、所謂雖_レ有_二粟而我得而食_一諸者也、

【訳】利益を追い求めれば、互いに貪りあい、奪い合うことになり、道理にあわないことになる。家庭の秩序は乱れ、国が治まることは難しくなる。論語の中にある景公が言った言葉、「米があっても私はそれを食べられなくなるだろう(財政がどんなに豊であっても、自分は安んじて食うことはできないだろう)」というようなことになる。

三七六 是の故に孔子は平生利を言ふこと罕_ニにして、「孟子」七篇、首_ニ義を先にして利を後にするを説く。

是故孔子平生罕_レ言利、而孟子七篇、首_ニ先義而後_レ利、

【訳】だから、孔子は通常は利について述べることはまれで、「孟子」七編の中で、

はじめに仁義を説いて、利はその後にと説いている。

三七七 昔、斉の宣王、堂下に穀觶こくそくの牛を見、其の将まさに以つて鐘かねに釁ちぬらんとするを傷いたみて、羊を以つてこれに易かふ、此れぞ是れ自己本心の端倪たんげい、方に発見流露の処なり。

昔者齊宣王、見_レ堂下穀觶之牛、傷_レ其將以釁鐘、而以_レ羊易之也、此是自己本心端倪、方發見流露之處、

【訳】昔、齊の宣王が、宮殿の下を通る牛を見た。その牛はひどく死を恐れている様子である。これから鐘に血塗ちぬる儀式のために犠牲となる牛で、その牛を可愛そうに思った宣王は、牛の代わりに羊にするように言った。見たものに思いやりの心(仁)を注がずにはおれないこれこそが、本来人に備わった正しい心の始まりで、それが表れたものである。

三七八 天は此れを得て天と成り、地は此れを得て地と成り、人は此れを得て人と成り、聖賢は此れを得て聖賢と成り、愚不肖はこれを失ひて、愚不肖と成る。

天得_レ此而成_レ天、地得_レ此而成_レ地、人得_レ此而成_レ人、聖賢得_レ此而成_レ聖賢、愚不肖失_レ此、而成_レ愚不肖、

【訳】天はこの思いやりの心(仁)があつて天となり、地はこれがあつて地となり、人はこれがあつて人となり、聖賢はこれがあつて聖賢となるのだ。愚か者は、この心がなくて愚か者のままである。

三七九 然れども其の、心たるゆゑんのものは、甚だ微にして又甚だ精なり。鉄を認めて金と為すべからざるなり。賊を認めて子と為すべからざるなり。

然其所_レ以爲_レ心者、甚微而又甚精、不可_レ認_レ鐵爲_レ金也、不可_レ認_レ賊爲_レ子也、

【訳】しかし、その心というものは大変微妙で、奥深いものだ。鉄を見て金と見誤ってはいけないし、邪悪なものを優れた人と認めてはいけない。

三八〇 鉄を認めて金と為さば、則ち己を誤ち人を誤つ。賊を認めて子と為さば、則ち毒を後世に貽す、戒めざるべからず、懼れざるべからず。

認_レ鐵爲_レ金、則_レ誤_レ己誤_レ人、認_レ賊爲_レ子、則_レ貽_二毒後世_一、不_レ可_レ不_レ戒、不_レ可_レ不_レ懼、

【訳】鉄を金と見誤れば、自身のみならず人をも誤らせる。邪悪な人を優れた人格者だと判断すれば、その害悪は後世にまで及ぶ。過ちを恐れ、自分を戒めなければならぬ。

三八一 此の処、方_{まさ}に是れ諸子百家の紛然として分岐するゆゑにして、聖道の、独り天下古今に高きゆゑのなり。

此處方は諸子百家之所_二以紛然分岐_一、而聖道之所_二以獨高_一於天下古今者也

【訳】このところが、多くの学派や学者がいろいろ入れ乱れ、分岐しているところであり、孔子や孟子の道だけが、昔から天下に高く示されている理由である。

三八二 糗_{ほしいひ}を飯_{くら}ひ艸_{くさ}を茹_{くら}ひ、将_{まさ}に身を終へんとするがときは。是れ曆山の高情。肱_{ひち}を曲げ水を飲み、楽しみ其の中にあるは、乃_{すなは}ち洙泗の逸興なり。

飯_レ糗茹_レ艸、如_レ將終_レ身、是曆山之高情、曲_レ肱飲_レ水、樂在_二其中_一、乃洙泗之逸興、

【訳】干し飯や草などを食べるような粗末な食事をして、それで身を終えようと努力するのは、あの歴山を耕した頃の帝王舜の気高い心情であつた。また貧相な家で、肘を枕にして、水を飲んでひもじさに耐えるような生活の中に、楽しみを見いだしているのは、孔子の世俗や貧賤を超越した風流な生き方の趣に通じるものだ。

三八三 孟子曰く、「其の為さざる所を為すことなく、其の欲せざる所を欲することなし。かくのごときのみ」と。

孟子曰、無爲其所不爲、無欲其所不欲、如是而已矣、

【訳】 孟子が言われている。「人としてしてはならないことしない。欲してはいけないことは欲しない。君子の道と言っても、ただこれだけのものである」

(20190302) 383

三八四 為さざる所は、事の上より言ひ、欲せざる所は、心の上より言ふ。為さざる所は、即ち欲せざる所なり。

所不爲者、從事上而言、所不欲者、從心上而言、所不爲、即所不欲也、

【訳】 人としてしてはならないことは、物事の面から言い、欲してはならないことは心の面から言っている。してはいけないことは、心でも欲してはいけない。

三八五 欲せざる所は不義なり。欲する所は義なり。

所不欲者不義也、所欲者義也、

【訳】 欲してはいけないことは、人の道からはずれていることだ。欲すること（やろうとすること）は人の正しい道だ。

三八六 いはゆる欲する所と欲せざる所とは、則ち審らかにこれを己に反りみ、謹みてこれを択ぶのみ。

所謂所欲與所不欲、則審反諸己、謹擇之而已矣、

【訳】 欲して良いことか、欲してはならないことか、自分にあてはめて判断し、慎重にどちらであるかを選ぶだけのことだ。

三八七 高^{かう}到^ちを米^{まい}塩^{えん}塵^{じん}紛^{ぶん}の際に存^{ぞん}養^{よう}し、世務を松月閑散の外に覷^{しよ}破^はする。

存^{ぞん}養^{よう}高^{かう}到^ち於^お米^{まい}塩^{えん}塵^{じん}紛^{ぶん}之際、覷^{しよ}破^は世務於^お松月閑散之外、

【訳】気高い生き方は、俗世間のわずらわしい中で失わないようにして、養い育てていく。世の中の雑務は、松が月に照らされているような静かなところで、きちんと見抜いていく。

三八八 痛く用を節して、信を民に失はず、軽く利を興すの説に動かさるを得ず。紀綱を肅して、士風を振励し、道徳を敬して、務めて国本を培ふ。

痛^{いた}節^{せつ}用^{よう}、而^{しか}不^ず失^は信^{しん}於^お民^{みん}、不^ず得^ず輕^{けい}動^{どう}於^お興^き利^り之^の説^{せつ}、肅^{しゆ}紀^き綱^{かう}、而^{しか}振^{しん}勵^{れい}士^し風^{ふう}、敬^{けい}道^{だう}徳^{とく}、而^{しか}務^む培^{はい}國^{こく}本^{ぽん}、

【訳】厳しく出費を節約して、人々の信賴を失わず、利を得る話に軽々しく動かされない。綱紀を正し、人としてのありようを鼓舞し、道徳を敬う。そのようにして国の根本を培うことに努める。

三八九 象に牙あり、雉に羽あり、虎豹に皮あり、皆以つて世の用を為すに足る。今、人にして才と徳となければ、則ち以つて用を為すに足らず、而して適^{まさ}に以つて累^{るゐ}を為すに足る。嗚呼^{ああ}人たるを以つてして夫^かの毛羽^{もうう}の類^{るゐ}に如^{ごと}かざるべきか。

象^{しやう}有^あ牙^が、雉^{けい}有^あ羽^う、虎^こ豹^{ひやう}有^あ皮^ひ、皆^{みな}足^{たり}以^{もつ}爲^な世^よ之^の用^{よう}、今^{いま}人^{ひと}而^{しか}無^く才^{さい}與^よ徳^{とく}、則^{すなは}不^ず足^{たり}以^{もつ}爲^な用^{よう}、而^{しか}適^{まさ}足^{たり}以^{もつ}爲^な累^{るゐ}、嗚^あ呼^あ可^べ以^{もつ}人^{ひと}而^{しか}不^ず如^{ごと}夫^か毛^{もう}羽^う之^の類^{るゐ}乎^や、

【訳】象には牙があり、キジには羽があり、虎や豹には皮があり、それらはみんな世の中の役に立っている。人に才能と徳がなければ、役に立つことができないだけでなく、かえってわざわいを起こす。ああ、人であるのに、あの毛や羽を持っているものに及ばないのではないか。

三九〇 兵の用は、火の烈しきに如くはなし。而して火を用ふるの巧みなるものは、洋夷に若くはなし。則ち私の防禦を為すは、固より亦これに従ひて其の兵制を議せざるを得ず。

兵之用、莫如火之烈、而用火之巧者、莫洋夷若焉、則我之爲防禦者、固亦不得_レ不_レ從_レ之而議_二其兵制_一矣、

【訳】 兵器は、火の烈しさが一番だ。そして、その火を用いて戦うことの巧みさでは、西洋人には叶わない。わが国の防禦を行うには、当然西洋の兵制の制度について議論していかなければならない。

三九一 私の兵制を議して彼の長ずる所を取らんと欲すれば、則ち彼の書に就きて講究せざるを得ず。是に於てか洋夷の学の蔓延昌熾するは、亦勢の必ず至る所なり。

欲議_二我之兵制_一而取_二彼之所長_一、則不_レ得_二不就_二彼之書_一而講究_二於_二是_一乎洋夷之學蔓延昌熾、亦勢之所_二必至_一也、

【訳】 わが国の兵制を議論して、西洋の長所を取り入れようとするならば、西洋の書物を読み研究しなければならない。こういうことから、西洋の学問が広がり盛んになるのは、間違いないことである。

三九二 洋夷の学、兵制より外、推歩の術、医療の巧も、亦皆私の及ばざる所。これを学ぶは猶ほ是れ可なり。かくのごとくして已まざれば、則ち吾恐らくは我が国体政治を挙げて、津津然として将に彼の習俗に倣はんとするなり。

洋夷之學、自_二兵制_一而外、推歩之術、醫療之巧、亦皆我之所_二不_レ及_一、學之猶是可也、如此而不_レ已、則吾恐學_二我之國體政治_一、津津然將_二倣_二彼之習俗_一也、

【訳】 西洋の学問は、軍事の他、曆、医療の技術など我が国の及ぶところではないが、これらを学ぶことはできる。しかし、このようなことがいつまでも止まな

いで続くと、我が国の国柄や政治が西洋の風習をまねるだけになるだろう。

三九三 洋夷は元通商を以つて国を建つ。而して其の政治に於けるや、収斂煩猥、蓋し遺利なし。則ち彼の学を為すものは、其の説を便とし、其の利を喜び、化して夷と為らざるもの、殆んど希なり。

洋夷元以「通商」建國、而其於「政治」也、収斂煩猥、蓋無「遺利」、則爲「彼之學者」、便「其說」、喜「其利」、不「化爲」夷者、殆希矣、

【訳】西洋の国々は、通商政策をもつて国が成り立っている。そして、その政治は、税を取り立ての方法は非常に煩雑であるが、恐らく徴収漏れはないであろう。西洋の学問を学んでいる者は、それがよい方法であると考え、その利点に満足しているので、ほとんどの人が西洋人のようになる。

三九四 「語」に云はずや、「子罕に利を言ふ」と。而して「孟子」開卷、亦務めて義利の分を言ふ。蓋し義を為せば、則ち人心悦服して、利自らこれに従ひ、利を為せば、則ち人心怨怒して、害亦これに従ふ。此れぞ是れ聖經賢伝の反覆丁寧、弁じて措かざるもの、国家治乱、世道汚隆の由りて判ずる所なり。

語不「云乎」、子罕言「利」、而孟子開卷、亦務言「義利之分」、蓋爲「義」、則人心悦服、而利自從「之」、爲「利」、則人心怨怒、而害亦從「之」、此是聖經賢傳、反覆丁寧、辨而弗「措者」、國家治亂、世道汚隆之所「由判」也、

【訳】論語には「孔子はたまに利について言われた」とある。そして「孟子」には真っ先に仁義を説いて、義と利の分別について力を込めて説いている。つまり、義にそつた行動を先にするならば、人は喜んでその人に従い、利というものも、その後自然についてくる。逆に利を優先させたならば、人の怨みをかけて怒りをかい、弊害が出てくる。これこそ、孔子が「論語」の中で、孟子が「孟子」の中で、伝えたかったものだ。このことを繰り返し説明するのは、国の治乱、道義の盛衰が、こういうことで判断できるからだ。

肄業餘稿 續

三九五 予、常に吾子輩ごしはいに示すに、天人一理、至道二なきを以つてす。

予常示ミ吾子輩以ミ天人一理、至道無ミ二、

【訳】私が、いつでもみなさんに言うように、天と人とは同じ一つの真理で貫かれて
いる。真理は二つはない。

三九六 今夫れ天遠し。而るに人は則ち近し。将に天道を識しらんとせば則ち必ず当に
先ず人心を識しるべし。

今夫天遠矣、而人則近、將識ミ天道、則必當ミ先識ミ人心、

【訳】天は、遠い。しかし、人は身近なところにいる。だから、天の真理を知ろうと
するならば、まず人の心を知らなければならない。